

え 江 戸 の 里 神 楽

(国指定重要無形民俗文化財)

稲城市東長沼2111
☎0423-78-2111
発行 1996. 2.20



江戸の里神楽

神楽は古代に発生した芸能で、民俗芸能の中では最も古い歴史をもつと言われます。その起源は、神霊しんれいを慰めるために演じたもので、神に捧げる舞踊でした。「神を招き迎えたときの神霊の依りたもう座」を意味する神座かむくらという言葉が、神楽の語源と考えられます。

古代に発生した神楽は、江戸時代初期には江戸市中に伝わり、江戸庶民の好みに応じて、いろいろな形に変化します。その一つが江戸の里神楽で、江戸と周辺の村々の神社の祭礼などで盛んに里神楽が奉納されました。この江戸の里神楽の特徴は、仮面を付けた黙劇もくげきであり、神話の世界を題材としたものを中心に演じられたことです。また演じる人たちが専門の神楽師であったこともあげられます。

現在都内には、四つの江戸の里神楽が伝承されています。間宮和麿社中（品川区）、若山胤雄社中（台東区）、松本源之助社中（荒川区）と稲城市の山本頼信社中です。四社中とも国の重要無形民俗文化財に指定されています。

山本頼信社中の江戸の里神楽は、初代の山本権律師ごんりつし弘信が室町時代初期の応安6年（1373）に創始したといわれ、現在の家元山本頼信氏は十九代に当たります。山本



国安神社神像（江戸名所図会）



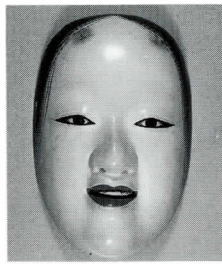
国安神社と仮殿（江戸名所図会）

家の近くにあった国安神社で神楽を舞ったのが始まりと言われ、『江戸名所図会』（天保7年刊）には、国安神社と仮殿・社人の建物が描かれ、この仮殿として描かれた建物が、祈禱殿としての機能を持ち、諸事の祈禱や神楽を舞う場所として使われたのではないかと考えられます。

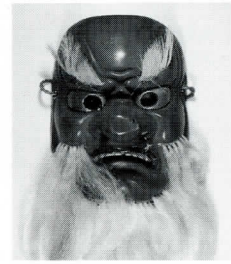
山本家には江戸時代中期の写本と思われる『神事式名録』という神楽の台本のほかに、明和6年（1769）に記された『岩井神社鈴森御神楽格式』という古文書（神楽の演目と持ち物・形相を記載）など数々の資料が残っています。これらの資料により、江戸時代から現在に至るまで里神楽が綿々と受け継がれてきたことがわかります。また江戸時代中期頃で50座の里神楽が演じられていたことが記録されています。

現在、山本頼信社中では、40数座の里神楽を演じていますが、その中の代表的な演目は次のとおりです。

- | | | |
|--------------------|---------------------|------------------|
| 〔古典もの〕 | あめのうきはし
天之浮橋、 | よもつしこめ
黄津醜女、 |
| すみのえのおおかみ
墨江大神、 | やくもじんえい
八雲神詠、 | あまのいわと
天之磐扉、 |
| けんきょくけいじん
剣玉生神、 | かんやらいのみのかさ
逐神蓑笠、 | あまのかえしや
天之返矢、 |
| ゆうげんぶんかい
幽顕分界、 | てんそんこうりん
天孫降臨、 | かささくらがり
笠沙桜狩、 |
| さんかいこうえき
山海幸易、 | ようぞくせんめつ
妖賊剪滅、 | みわのかんすぎ
三輪神杉、 |
| さちめうばつ
狭穂討伐、 | くまそせいぼつ
熊曾征伐、 | とういせいぼつ
東夷征伐、 |
| さかおりれんが
酒折連歌、 | けいていのさぐりゆ
兄弟探湯、 | いひほうらく
億兆豊楽、 |
| けいしんあいこく
敬神愛国、 | みほがさうおつり
三穂崎漁釣 | |
| 〔近代もの〕 | もみじがり
紅葉狩 | |
| 〔お伽もの〕 | いなほのしんけい
稲葉素兎 | |



天照大神の面



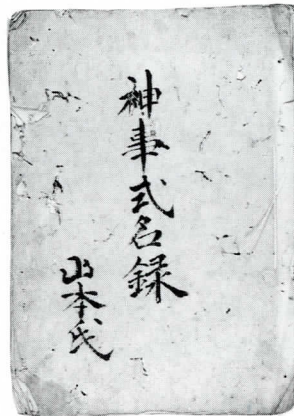
大国主命の面



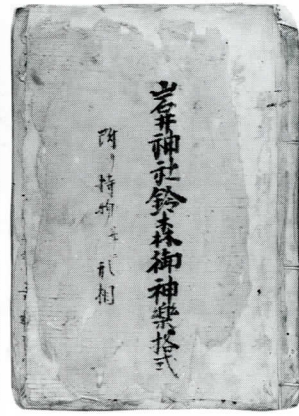
鬼女の面



大蛇の面



神事式名録



岩井神社鈴森御神楽格式



「墨江大神」の式三番



「天之磐扉」の神々